

# 韓国における日本儒学の研究

朴 暎美

## 1. はじめに

韓国における日本研究は、1980年まではジャーナリストや在野の学者、作家などによって行われ、人文学的知識に基づいた特殊論や印象論的な分析に偏る傾向にあった。1980年代以後、日本が世界第二の経済大国に上昇したため、韓国の学界やメディアにおける日本認識は少しずつ変化し、日本に対する関心の高まりとともに日本研究が量的に増加した。1990年代になると、日本に留学したことのある研究者が韓国の学界に多数参入し、日本研究が飛躍的に成長した。1990年代は、それ以前と比べて多様な学問の潮流が形成され、日本研究が専門化の段階に突入した。そして、2000年代の韓国における日本研究は、それ以前の包括的テーマを中心とする特殊論的な日本研究から脱皮し、多様化・専門化した領域に発展している<sup>1</sup>。

2009年現在、韓国の四年制大学には100以上の日本関連学科が設けられており、大学院にも80近い日本学関連のコースが設けられている。また、日本学関連の学会が30以上あり、会員数2,000人を数える学会もあるほど研究人口は多い<sup>2</sup>。

ところが、2012年の調査によると、日本研究者の年齢層は50～60代が約60%を占め、研究分野は語学や文学が過半数以上を占めるという、不均衡な様相を示していることが明らかになった<sup>3</sup>。殊に日本儒学に関する研究は微々たるものであり、まだ初期段階にあると考えられる。本稿は、これまで韓国で行われてきた日本の儒学に関する研究成果を分析することを目的とする。

- 
- 1 陳昌洙「韓国における日本研究」『立命館国際地域研究』36号(2012年)、165-168頁。
  - 2 李徳奉「韓国における日本学研究的ジレンマ」、第4回国際日本学コンソーシアム「日本学研究は誰のものなのか?」、2009年12月15日、於お茶ノ水女子大学人間文化創成科学研究科棟5階SCS室。
  - 3 世宗研究所日本研究センター『2012年調査資料：韓国日本学の現況と課題』（データベース）、2012年。<http://www.jpfr.or.kr/down/CURRENT%20STATE%20OF%20JAPANESE%20STUDIES%20IN%20KOREA.pdf>。

## 2. 日本儒学に関する研究

韓国において日本儒学に関する研究が本格化したのは、1995年、金ソクン(김석근)による、丸山真男『日本政治思想史研究』(トンナム통나무)の翻訳出版以後のことである。この本によって、江戸時代の儒学思想と荻生徂徠の思想が韓国に紹介された。2000年には、朴キュテ(박규태)と李ヨンス(이용수)が、源了圓『徳川思想小史』(中公新書、1973年)を『徳川時代の哲学思想』(芸文書院)として翻訳し、同年に李キドン(이기동)が、『伊藤仁斎』(成均館大学校出版部)を著した。2006年に厳ソクイン(엄석인)は、田尻祐一郎『山崎闇斎の世界』(ぺりかん社、2006年)を翻訳して、『山崎闇斎: 日本的朱子学の原型』(成均館大学校出版部)という書名で刊行した。2007年、朴ホンギョ(박홍규)は、渡辺浩『近世日本社会と宋学』(東京大学出版会、1985年)を『朱子学と近世日本社会』という書名で芸文書院から刊行した。2010年、林泰弘は、『日本思想に会う—日本の代表的な思想家15人の生涯と思想』(成均館大学校出版部)を出版した。以上のように、韓国で出版された日本儒学に関する本は、主に日本人研究者の著作を翻訳したもので、まれに韓国人研究者の著作が見受けられるという状況である。

林泰弘は、2005年から2009年まで、韓国・中国・日本で行われた日本儒学及び国学思想の研究について調査し、その研究動向を分析した報告書を毎年発行している<sup>4</sup>。その報告書の一つである「最近韓国の日本儒学研究の現況(2007年-2009年)」で、林は、2000年に入ってから日本儒学の研究に際立った進展が見られる理由として、「日本儒学に関する著作の紹介」「韓国における日本人研究者の研究活動」「日本に留学した専門分野の学位者の輩出」を挙げている。林はさらに、2007年から2009年にかけて韓国で研究対象とされた日本儒学者のうち、荻生徂徠と伊藤仁斎が1位と2位を占め、研究が彼らに偏っている現象を指摘している。

4 林泰弘「2005年以降日本儒学及び国学思想の研究の動向」『儒教文化研究』第11輯(2007年)。  
 ——「2006年度日本儒学及び国学思想の研究の現況—江戸時代思想家研究を中心に」『東洋哲学研究』54(2008年)。  
 ——「2007年度日本儒学及び国学思想の研究の動向—江戸時代思想家研究を中心に」『日本思想』14(2008年6月)。  
 ——「2008年度日本儒学及び国学思想の研究の動向」『韓国哲学論集』29(2010年)。  
 ——「最近韓国の日本儒学研究の現況(2007年-2009年)」『韓国哲学論集』28(2010年)。  
 ——「2009年度日本儒学及び国学思想の研究の動向」『日本思想』18(2010年)。

### 3. 日本古文辞学派に関する研究

荻生徂徠（1666–1728）に関する研究成果は、朝鮮の思想家丁若鏞（1762–1836）との比較研究と、徂徠の『論語』の解析に関する研究に分けて考察できる。荻生徂徠は、朱子学を「憶測にもとづく虚妄の説にすぎない」と喝破し、朱子学に立脚した古典解釈を批判した後、古代中国の古典を読み解く方法論としての古文辞学（護園学派）を確立した<sup>5</sup>。

丁若鏞は朝鮮後期の実学者で、字は美鏞・頌甫、号に茶山・三眉・与猶堂・俟菴・紫霞道人・籟翁などがある。1789年、式年文科の甲科に及第したが、カトリック教徒という理由で弾圧に遭い、海美に流配された。丁を寵愛した正祖が亡くなった1801年（純祖1年）に辛酉教難で長鬢に流配され、のちに黄嗣永帛書事件に連座して康津に移配された。そこで18年間、研究と執筆に没頭して、政治機構の全面的改革と地方行政の刷新、農民の土地所有の均一化、そして労働力による収穫の公平な分配、奴婢制の廃止などの政治改革策を主張した。このような学問は、柳馨遠と李瀾の実学を受け継いだもので、殊に重農主義的な学風を継承したものであった<sup>6</sup>。

荻生徂徠と丁若鏞の比較研究のなかでは、白ミンジョン(백민정)「荻生徂徠・太宰春台と丁若鏞の人性論の比較：『論語』陽貨編2-3条目の解析を中心として」（『哲学思想』25 [2007年]）と、金テチュン(김태준)「東アジア的な次元で見る脱性理学的な政治論：黄宗羲・荻生徂徠・丁若鏞」（『韓国実学研究』13 [2007年]）が注目されている。

荻生徂徠に関しては、哲学専門の李ギウウォン(이기원)が、最も多くの論文を発表している。李の主な研究成果は、次のとおりである。

- ・「荻生徂徠の教育構想」『人文科学研究』35（2012年）
- ・「荻生徂徠と太宰春台の『論語』注釈」『大東文化研究』78（2012年）
- ・「荻生徂徠の政治思想と共生の為の寛容の技術」『日本学研究』32（2011年）
- ・「荻生徂徠の人間学」『日本研究』14（2010年）
- ・「太宰春台の訓読を通して見る徂徠学派の言語観」『日本学研究』28（2009年）
- ・「近世日本の思惟構図の治療学」『儒学研究』19（2009年）

5 『岩波哲学・思想事典』岩波書店、1998年、185–186頁。

6 『韓国民族文化大百科事典』한국정신문화연구원、1991–1995年。

- 「荻生徂徠の古文辞学」『日本思想』16（2009年）

さらに、イムオクキュン（임옥균）は、朱子の「四書」注釈と比較しながら、荻生徂徠の特徴を究明している。以下は、イムの研究である。

- 「朱子と日本古学派の『中庸』の解釈」『東洋哲学研究』63（2010年）
- 「朱子と日本古学派の『大学』の解釈」『東洋哲学研究』61（2010年）
- 「荻生徂徠の『論語』の解釈上の特徴（1）—朱子の解釈との比較」『東洋哲学研究』57（2009年）
- 「荻生徂徠の『論語』の解釈上の特徴（2）—朱子の解釈との比較」『東洋哲学研究』60（2009年）

イムオクキュン（임옥균）は、荻生徂徠の『論語』「八佾」篇と「里仁」篇に関する解釈を朱子の注釈と比べ、荻生徂徠の『論語』解釈の特徴を、次のように明らかにしている。荻生徂徠は、(1)『論語』を今文と古文に分けて分析し、(2)古文と今文の慣用語を文字通り解釈してはいけない、朱子は古文に従わなかった結果、解釈に誤謬が多かったと批判し、(3)孔子が実物について語った問題を宋代の儒学者らのように「理」と「心」という主観的な言葉に置き換えて解釈してはならないと主張し、(4)中国と夷狄を、先王の道の有無によって明確に区分し、中国古代の理想社会に限らず、当時の日本も先王の道が実現できる国になったと主張し、(5)天命を人格として解釈し、神の存在を認めたとし、(6)音楽に対する道徳的な評価を拒否した、と見ている。

#### 4. 日本古義学派に関する研究

伊藤仁斎（1627-1705）の学問は、当時支配的だった朱子学的經典解釈を廃し、直接テキストを検討する手法を採っていた。朱子学は学問体系としては非常に整ってはいたが、その成立過程に流入した禅学や老荘思想という非儒教的な思想のために、経書の解釈において偏りがあった。仁斎は、そのような要素を儒学にとって不純なものとし、いわば実証主義的な方法を用いた<sup>7</sup>。韓国における伊藤仁斎に関する研究は、2005年以降、毎年一編ずつ発表されている。そ

7 『岩波哲学・思想事典』岩波書店、1998年、91-92頁。

のうち、イムオクキュン（임옥균）は「原典分析」という方法を使って、伊藤仁斎の『論語』『孟子』の解釈を朱子のそれと比較し、古義学派の特徴を明らかにしている。

たとえば、次のようなものがある。

- ・「伊藤仁斎の『論語』の解釈—朱子の解釈との比較」『東洋哲学研究』69（2012年）
- ・「日本の古学派の伊藤仁斎」『儒者の文化（선비문화）』21（2012年）
- ・「伊藤仁斎の『孟子』の解釈—朱子の解釈との比較」『東洋哲学研究』66（2011年）

イムと違って、高ヒタク（고희탁）は、思想の解説に重点を置き、以下のような成果を上げた。

- ・「江戸時代「民」の政治的な覚醒とその逆説」『日本思想』22（2012年）
- ・「儒学的な構図の再編と公共論的な探求」『東洋政治思想史』8（2009年）
- ・「神国日本の政治思想」『日本研究論叢』28（2008年）

伊藤仁斎を朝鮮の星湖学派と比較した研究には、咸ヨンデ（함영대）の「星湖学派の王覇論」（『東洋古典研究』44 [2011年]）と、「星湖学派の「尽心」・「知性」・「事天」に対する解釈」（『東洋哲学』33 [2010年]）がある。星湖学派は、李瀾（1681-1763、号は星湖）を中心として、朝鮮時代に京畿道地方で活動した実学派である。星湖学派は、「理気心性」に関して新しい解釈を提唱し、「実証」と「実用」という学風をもたらした。

元ヨンジュン（원용준）は、「伊藤仁斎の『孟子』に対する見方について」（『東洋哲学研究』61 [2010年]）で、山鹿素行・荻生徂徠の『孟子』と比較しながら、次のように述べている。

伊藤仁斎は、『論語』を宇宙第一の書物として敬い、『孟子』を『論語』に並ぶ經典として重視し、したがって『孟子』を『論語』の注疏ととらえた。だが、仁斎は、『孟子古義』の総論で『孟子』の体裁が各篇により異なる点を指摘し、『孟子』が一人の手によって作られたものではないと主張した。さらに仁斎は、『語孟字義』を通して、朱子学を異端として攻撃した。仁斎は、戦国時代異端の学説を追い払うため戦った孟子に自分をなぞらえたのだ。

## 5. 日本朱子学派に関する研究

韓国においては、日本の朱子学派に関する研究はさほど進んでいない。しかし、朱子学が、朝鮮王朝の建国理念として500年間にわたり国家と社会を支えた思想であったことを考えれば、韓国の研究者の関心を惹きやすい分野と言える。韓国では、藤原惺窩、林羅山、山崎闇斎、木下順庵、貝原益軒、佐藤直方、新井白石、三浦梅園などの朱子学派に対する研究が行われている。そのうち、木下順庵、貝原益軒、佐藤直方に関する研究は、初期段階として僅かに試みられている。とはいえ、これら朱子学派の人々は朝鮮通信使との交流が比較的多かったため、今後、日本の朱子学派に関する研究が活発化することが期待される。韓国には、山崎闇斎と新井白石に関する研究が非常に多く、なかでも新井白石と朝鮮通信使との関連に注目した研究が極めて多いので、本稿では新井白石については言及しない。

藤原惺窩に関する研究は、主に姜沆との関係を中心として行われていて、崔テウ(최대우)の「姜沆の衛道精神と日本への儒学伝播」(『湖南文化研究』38[2006年])が挙げられる。

林羅山については、朝鮮通信使との交流に関する研究が多数を占めているが、金仙熙の「『排耶蘇』論争で見る林羅山の儒学思想に対して」(『日本文化研究』38[2009年])と、李ヨンス(이용수)の「林羅山の理氣觀」(『韓国哲学論集』31[2011年])は、林羅山の思想を考察している。

朴鴻圭は、山崎闇斎の思想について次のような研究を行っている。

- 「神儒妙契：山崎闇斎の垂加神道」(『亜細亞研究』114(2003年))
- 「山崎闇斎의 理念神國論」(『政治思想研究』8(2003年))
- 「南冥曹植と山崎闇斎：處士・賓師・王師」(『南冥学研究』11(2001年))
- 「武家体制と政治思想：山崎闇斎に関連して」(『日本思想』3(2001年))

また、山崎闇斎が李退溪から受けた影響を研究する論文が多い。代表的な研究者として、嚴ソクイン(엄석인)がいる。

- 「李退溪の思想と山崎闇斎学派との関係を再検討—理氣論の理解を中心として」(『退溪学報』126(2009年))
- 「山崎闇斎の「敬」の言説：李退溪との比較を通」(『日本思想』3(2001年))
- 「山崎闇斎と李退溪의 理氣論」(『退溪学と儒教文化』23(1995年))

## 6. 日本陽明学派に関する研究

1993年に発表された李ミョンハン(이명환)の「日本の陽明学の受容と展開」(『人文學研究』20 [1993年])をはじめ、1990年代は日本の陽明学に関する紹介が大半であった。近年、近代日本の陽明学を分析した研究が主流となっている。

- 李ヘキョン(이혜경)「陽明学と近代日本の権威主義—井上哲次郎と高瀬武次郎を中心として—」『哲学思想』30(2008年)
- シンヒョンスン(신현승)「近代日本の学術と陽明学」『日本思想』14(2008年)

また、中江藤樹に関する研究も多少進められ、次の論文がある。

鄭址郁「中江藤樹の誠意説」『哲学論集』29(2012年)

韓睿姫「熊澤蕃山の誠意説—中江藤樹と比較して」『陽明学』7(2002年)

朴暎美「近代朝鮮の儒者の中江藤樹像」『日本学研究』29(2010年)

鄭址郁は「中江藤樹の誠意説」のなかで、王一菴、劉宗周、中江藤樹の「誠意説」を比較分析し、中江藤樹の「誠意説」と日本陽明学の特徴を探求している。

## 7. まとめ

韓国において、日本儒学に関する研究は2000年代に入ってから本格化した。本稿では、過去約10年の研究を、古文辞学派・古義学派・朱子学派・陽明学派に分けて概観してきた。古学派を古文辞学派と古義学派に分けて取り上げたのは、この二つが韓国の研究者の関心をより多く惹いているためである。韓国で非常に多く研究されているのは、古文辞学派の荻生徂徠と古義学派の伊藤仁斎である。特に、荻生徂徠と丁若鏞、伊藤仁斎と丁若鏞・星湖学派との比較研究が注目されている。朱子学派に関する研究は、主に朝鮮通信使研究の延長線上で扱われている。他方、山崎闇斎の研究においては、退溪学との比較研究が相当進んでおり、高いレベルの研究成果も出されている。一方、陽明学に対する研究はまだ初期段階にとどまっている。

韓国での日本儒学に関する研究は、哲学や日本思想を専門とした研究者によるものが大半で、哲学や日本関連の学会誌に掲載されるものが多い<sup>8</sup>。さらに、研究者のなかには日本留学経験者の割合も高い。このような偏りによって、次のような問題が生じている。(1) 日本学界の研究成果を無反省に韓国に应用すること、(2) 日韓比較研究が多いこと、(3) 漢文の原典を読める専門的漢学研究者が少ないこと。

このような問題があるにせよ、今後の韓国の日本儒学の研究は、日本の儒学研究に様々な分析と研究方法を提示できるであろうし、さらに、日本儒学の究明にとどまらず、アジアの儒学の研究にも貢献し得るものだと考えられる。

---

8 本文で取り上げた学術誌の発行機関は次の通りである。『日本思想』：韓国日本思想史学会、『東洋政治思想史』：韓国東洋思想政治思想史学会、『日本研究論叢』：現代日本学会、『東洋古典研究』：東洋古典学会、『東洋哲学』：韓国東洋哲学会、『日本文化研究』：東北アジア文化学会、『韓国哲学論集』：韓国哲学研究学会、『政治思想研究』：韓国政治思想学会、『湖南文化研究』：全南大学校湖南学研究院、『人文學研究』：中央大學校人文科學研究所、『日本学研究』：檀国大学校日本研究所。